

FD ニュースレター

Health Sciences University of Hokkaido

北海道医療大学FD委員会

FD News Letter No. 2



■巻頭言

FD合宿研修の実施にむけて

学長 廣重 力

このたび本学でも、阿部和厚FD委員長の肝入りでFD委員会によるワークショップ型FD合宿研修を実施することを決定しました。

本学は、今年度、心理科学部を加えて、薬学部、歯学部、看護福祉学部の4学部からなるユニークな医療総合大学として、さらに発展しようとしています。このような折、現在、大学基準協会による評価を受けるべく準備中です。これは総合大学としての機関評価が中心です。各学部も総合大学全体のなかで評価され、本学の教育理念の実現に向けてどのような組織的教育が大学全体で行われているか、そして教育改革の具体性が問われます。具体性は各教員の意識にささえられます。本学の教育改善に対する組織的取り組みとして、意識改革に定評のあるワークショップ型合宿FDへの期待はおおきく、これによって各教員が大学全体における役割を意識し、大学全体が新たな前進をはじめることがみえてきます。

昔話で恐縮ですが、いまから7年ほど前に、本学の客員教授をしていた私は、本学のFD委員会主催の会に呼ばれ、「大学教員の意識改革」という話をしました。北海道大学の先行的な改革を目指して努力していた4年間を振り返り、なにか感想をのべてほしいという医療大学の希望に応じたものです。

あの当時、私は北大改革の柱として、大学院重点化、学部一貫教育、キャンパスアメニティの向上、それに教員の意識改革の4つをあげて、機会あるごとに喧伝しておりました。幸いにも前3者は在任中

に動き出しておりましたが、最後の点ではさっぱり改善の実態が見えず、これが北大の将来に影を落とさなければと懸念しておりました。そこで、本学の求めに応じて上記のタイトルを選んだのであります。しかし、どうもいま一つインパクトを欠いていたという印象が強く残っています。どうやら意識改革の「決め手の提案」が欠落していたようです。いまにして思えば、教育の質が大学の存亡にかかわってくる、具体的教育改革の方策と実施、教育の社会的説明責任、各教員の教育業績評価の必要性に対する危機意識、それを支える効果的FD活動充実の緊急性という問題意識が希薄だったようです。



本学は、これまでの「21委員会」や「08行動計画委員会」の積み重ねが実を結び、いまや医療系総合大学としての形を整えつつあります。真に問われるのは本学の「教育の質」であり、この大学の将来の存亡がこの「教育の質」にかかっています。これは、まず、総合大学としての教育理念をもつ大学全体の課題であり、そして、このもとに各学部が背負うべき課題でもあります。各教職員が全学的な視野から共通の認識をもち、大同団結し、実効をあげていくことが求められています。

この度の合宿研修は、まだ経験のない方々には抵抗感もあるかもしれませんが、しかし、学部をこえた

集まりで本音をぶつけ合いながら、大学全体の視点から教育改善を考え、共通の理解をえて、社会が求める本学の教育の義務と責任を確認するまたとない機会になると期待されます。同じ総合大学に籍をお

き、同じように専門職業人の育成に携わっているものの悩みや喜び、誇りを、互いに確かめ合うことができるだけでも、大きな成果といえるのではないのでしょうか。合宿研修の成功を期待します。

和気あいあいとFD

この度、この4月に就任したばかりですが、FD委員会の委員長を拝命いたしました。私は、北海道大学で10年以上にわたり、医学部と全学の教育改革、および点検評価にかかわり、とくにこの6年ほどの活動では、さまざまな面で全国の大学から先進的と評価されるようになりました。FDおよび教育改革に関連する招聘講演は約80回をかぞえ、国際的なものも10回ほどとなっています。また、私が中心となって企画、実施した合宿型FDも15回あります。東北大学全学、鹿児島大学全学、一ツ橋大学全学、福井大学工学部、秋田大学工学資源学部では初めての合宿型FD、また、岡山大学医学部でも同様のFDを実施してきました。さらに、九州大学全学、長崎大学全学、東京医科歯科大学全学、大阪歯科大学でも合宿型FDに招かれました。また、京都大学、名古屋大学、山形大学、神戸大学ではFD講演会に数度招かれています。実践的であることで評価されてきました。このため、北大でのFDは全国的に知られるようになり、ここに参加者を派遣して、自力で北大方式合宿型FDを実施した大学もいくつかあります。全国的にみると、大学全体で合宿FDをするかどうかは、教育改革の熱意の指標のようになっていて、事実、これらの大学は教育改革で目だってきています。

また、私はこの5年ほど大学基準協会です仕事をしています。わたくしが中心で大学全体の評価をしたものは14大学あり、その13大学は私立です。また、評価基準作成、評価方法のマニュアル化にもかかわっていますが、委員の中心は私立大学の教員やリーダーたちであり、私立大学の現状も勉強させて

FD委員会委員長 阿部和厚

いただきました。

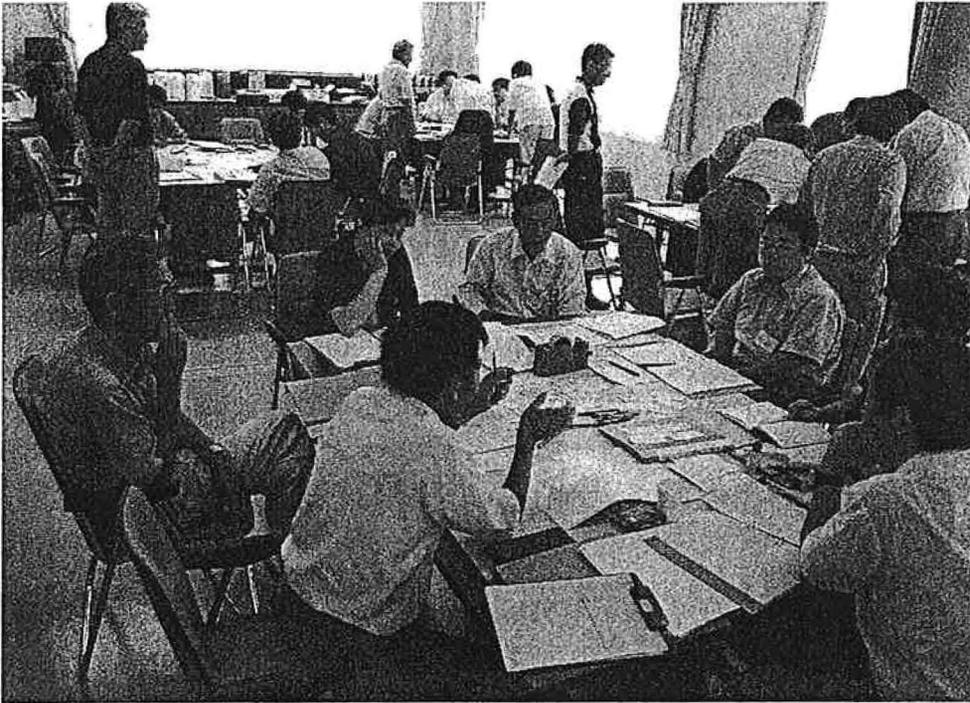
以上のようなキャリアから就任早々の委員長に任命されたものと拝察します。他大学でのFD研修会は、その大学、その現状に合わせて、一步前進することを心して企画・実施してきました。北海道医療大学も、個性ある大学として大きく発展していくために、お役に立てればと思っています。よろしくお願いいたします。



FDとは

いまさらFDでもないと思いますが、端的にいうと、教員の教育資質の向上に対する組織的研修であり、これが組織の教育改革に具体的に結びつく必要があります。ここでの要は教員の教育改革と改善への貢献となります。

私が合宿型FDを行ったのは、平成4年8月北大医学部でした。熱意ある若手数人をあつめて、勉強会を重ね2泊3日で実施しました。学部長から講座長に教育に責任のもてる教員を出すようにという案内です。教授の指名なので出た教員も少なくなかったのですが、終わっての感想は、目から鱗がおちた、よい意味での洗脳だったなどで成功。この成果のほとんどは、学部のカリキュラム改革に生かされ、全国でも先進的な部分のあるカリキュラムができました。またその後、回を重ねるごとに何らかの改革が実現しています。昨年からは、数名の学生をいれての研修としています。カリキュラムは、学生中心が基本だからです。



筆者がこの8月に指導した秋田大学工学資源学部FD

全学で

北大は12学部あります。これをまとめたFD実施は容易ではありません。私は平成4年から全学の点検評価委員会で、学生による授業評価、教員の教育業績評価、成績評価の実態などを扱ってきました。別に、教育改善関係の講演会、新任教官研修なども扱ってきました。この流れのなかで、FDを実施する必要があることをうったえ、トップがFDの実施はこれからの大学の存亡にかかわると認識し、大学全体のFDが実現しました。平成10年です。

おわかりのように北大ではFDとは、ワークショップ型合宿研修のことです。意識改革に最も効果があり、その後の教育改善の行動を現実のものにしていく力となっているからです。北大でおこなったときには、全学でのこのようなFDはまだほかになく、効果的FDを探っていた全国の大学に注目されるようになったわけです。学部長指名で戸惑いながら参加する教員の多い中で、ある合宿研修で「このワークショップは価値があるか」という終了時のアンケートで、すこしあり13%、かなりありときわめてあり87%で全員が肯定していました。これまで私が実施した15回ともすべて同じようです。

「あまり気がすまないで参加したが、終わって

みて、参加してよかった」という意見もよくききます。こうして、学部にかえり、その学部で同様のFDを実施するところもできています。

宿泊するのは

実はFDの面白みは宿泊にもあります。宿泊がよかったという意見もたくさんあります。初めて合宿FDを実施した長崎大学の副学長は、夜の会で、「いろいろ抵抗もあったけど、FDはとにかく宿泊が重要ときいているので、ここにこぎつけました」と私に同意をもとめ、学長もいれて和気あいあいの議論となりました。

「ふだん話したことのない他の分野の人たちと話しができたのがよかった」という意見もよくききます。全学のFD参加をきっかけに、学部でも合宿FDを毎年おこなうようになったある学部では、FD：friendly drinking ということばを生み出しました。よっぱらう人はいません。教育を語るのに力はいります。和気あいあいのなかから、組織としての一体感がうまれてくることを何度もみてきました。こういった会は、ワークショップではアイスブレイキング効果といいます。ワークショップの成功の鍵は、このうちとけ、アイスブレイキングにあるといわれ、

全体の研修時間の10から20%をこれにあてる価値があるといわれています。

これからの大学力は、多くの教員、構成員がいかに一致団結して高きをめざすかにかかっています。

幸いにして

わたくしは、他の大学でFDをするときには、その大学の特徴、アピールできる点は何ですかと問うことにしてきました。鹿児島に行くと、薩摩魂はどうした。長崎に行くと、日本で最初に西洋文明をいれたことを生かさないとどうする。こんななかで薩摩学とか長崎学が生まれてきました。幸いなことに、私はいまこの大学で新しい学部に籍をおくこと

になりました。教員はふだん顔をあわせるとよりよい教育するにはどうするかという話になります。この学部を日本で一番よいものにしようとして燃えています。ぜひFDに参加したいという教員も多くいます。また、先日の喜多村先生のお話にあったフレッシュマン教育こそ大事ということも肌で感じているようです。

また、FD委員会の雰囲気もよく、率直な意見がでて、これを一步前進につなげることができると感じています。まず、お互いにオープンに話をするところからはじまります。

みなさん、卒業生が自慢できるような大学にするには、どうするのがよいのでしょうか。

薬剤師養成カリキュラム作成に関するワークショップに参加して

薬学部FD委員 黒澤 隆夫

近年の生命科学の進歩によって、膨大な知識と技術が医療に要求されるようになりました。これからもこの傾向はますます増え続けることは明らかです。医療の一端を担う薬剤師も、より広く深い知識と高度な技能が求められることは当然であり、薬学教育のより一層の充実と改善が必要となります。

わが国における全薬剤師の約80%が私立薬科大学あるいは薬学部の出身者です。したがって、私立大学は薬剤師の養成に大きな役割を果たしてきました。しかしながら、その根幹を成す薬学教育カリキュラムに関しては、私立大学が主体性を持って改善に取り組んできたとは必ずしもいえません。また最近の薬剤師を取り巻く社会的情勢、修学人口の減少、さらに多様化する入試形態などは、教育現場にこれまでに経験したことのない問題を提起しつつあります。これらを鑑み、私立薬科大学協会は2000年8月に、時代にそくした薬剤師養成カリキュラム作成のための検討委員会とその作業部会を設けて、新しいカリキュラム方式を取り入れた薬剤師養成カリキュラムの作成を開始し

ました。この新カリキュラム方式の考え方、手順を理解するための第1回ワークショップが、2001年1月5日と6日の二日、共立薬科大学を会場に開催されました。



筆者はそのワークショップに参加したので、その概要と感想を述べてみます。参加者は27人で、そのほかに、コンサルタント、タスクフォースを含めると総勢48人でした。参加者は3グループに分かれ、それぞれ与えられたテーマについて2日間にわたってグループ討議を行いました。その内容は、教育を「学習者の行動（知識・技能・態度）に価値ある変化をもたらすもの」と捉え、1) 学習者の到達すべき目標の設定、2) 教育方法、評価法の具体的な作成、3) これらの方法の妥当性を評価し、より良いカリキュラムの作成法を学習する、というものでした。

われわれのグループに与えられた1日目のテーマは「砂漠で遭難したときにあなたならどうするか」というものでした。グループとしての意見決定方法、問題

点の抽出法 (K-J 法) により「薬学教育の問題点」を各自ランダムにピックアップして、それらの関係を結びつけ、問題の焦点を明確化する方法を体験しました。2 日目は「遺伝子改変技術の基礎と応用」というテーマで、10 項目の到達目標を設定して、カリキュラムの作成を行いました。メンバーは様々な分野の寄せ集めでありましたが、全員が薬学系教員ということもありまして、進行役をそっちのけで議論を推し進めたり、言いたい放題という状況でしたが、最後には不思議に意見が集約され、時間内にテーマに沿ったカリキュラムができました。最後に各グループで作成したカリキュラムについての発表会を開き、それぞれについて参加者全員による再検討が行われました。

これらの体験を通して、より良い教育効果をあげる

ためには、教育方法の改善、教育評価法の妥当性の検証、個々の教員が学生の側に立った視点への意識改革と努力が必要であること、特に適切な時期に適切な教育評価をすることがいかに重要であるかを再確認することができました。

しかしながら、一方で現実を省みる時その難しさを感じざるを得ません。大学教員は教育と同時に研究、総合大学の宿命ともいえる次々に増える学単位、全学単位の各種委員会などに忙殺されているのが現状です (おそらく、これらが業績評価の対象となるでしょう)。より良き教育を目指す上で、FD 面からの教員の不断の努力と、ともすれば忘れ去られがちな教員の側に立った環境作りが必要不可欠なものと思います。

歯学部における FD 合宿について

歯学部では、昨年からは歯科医師臨床研修指導医を対象に、カリキュラムプランニングのワークショップ (以後 WS と略)、共用試験の Computer Based Testing (CBT) および Objective Structured Clinical Examination (OSCE) についての WS を開催しています。これらの WS を開催することとなった経緯は、歯科医師臨床研修制度 (卒後の歯科医師対象) の充実を図るために、厚生省 (現厚生労働省) と歯科医療研修振興財団が平成 10 年から始めた歯科医師臨床研修指導医 WS (通称富士研 WS) に参加した教員たちが中心となって、そこで得た知識やカリキュラムプランニングの考え方、方法、また、学習方略、評価についての手法等を本学部に広めようという趣旨からです。今回は、指導医 WS の内容を中心に紹介したいと思います。

すでに、昨年、今年と 2 回の WS が開催され、歯学部の臨床系教員およびあいの里医科歯科クリニックの歯科医師等約 60 名が参加しました。日程は、一泊二日で、当別町のスウェーデンヒルズ内の北海道新聞

歯学部 FD 委員 川上 智史

社研修センターを貸切、分刻みの日程で開催しております。WS の運営には、本学関係者のほかに、富士研 WS 同窓生の他大学の先生方にも、タスクフォース (語源



は軍隊用語で特殊任務をもった機動部隊、WS では世話人) をお願いし、参加していただいております。実際の内容は、プレアンケートに始まり、望ましい学習活動、卒後臨床研修の問題点の抽出、カリキュラムとは、教育目標の設定について、学習方略の立案、教育評価法などについて、ミニレクチャー、グループ討議、発表と全体討議を繰り返して、臨床研修カリキュラムの一例をプランニングしていただいております。参加者の方は、教授から助手まで幅広く、7~8名のグループに分れ一つのテーマについてそれぞれの立場から意見、アイデアを出し合い、共同で作業を進め、約一時間程度で一つの結論を出す方式で WS を進めております。最初は、戸惑う方が大多数ですが、時間が経つにつれ、立場、職位を越え、熱い討議が繰り返され



れ、1日目の夜にはグループが一体となって作業が円滑に進むようになります(2回の経験から)。また、1日目の日程終了後にオープンするミニバーでは、深夜?早朝?まで、教育や臨床、研究と講座や専門を越えた実りある議論が展開されています。2日目は、皆さん眠い目を擦りながら、前日に引き続き、プロダクト作業を行い、午後にその成果を発表し、WSを終了しております。終了後の参加者の方々の感想、ご意見では、多くの方に概ね満足していただいておりますが、時間日程の関係上、ミニレクチャー、グループ討議が足りないなどのご意見もあり、今後検討を要する点も

多々あり、運営にあたる我々も反省すること然りです。ただ、このようなWSは一度参加してすべてを理解することは、なかなか難しく、WSで得た知識を実行に移し、広めていくことが肝要ではないかと思えます。私自身もWSの運営に携わるとともに、他大学の教育開発WSに参加し多くの経験をさせていただいております。これらの経験が、本学の新しい教育プログラム構築に少しでもお役に立てればという気持ちでいっぱいです。今後とも、多くの方々のご理解とご協力をお願い致します。

フレッシュマン教育は大学の将来をきめる

喜多村 和之 氏 講演

私大の第三者評価について

平成14年8月22日 本学総合図書館大会議室において喜多村 和之 氏の講演がありました。夏休み期間中とはいえ満席の会場で、参加者は 午前10:30 から2時間ばかり、喜多村氏のほとばしるような熱弁に聞きいりました。

喜多村和之氏は、広島大学 大学教育研究センター教授、放送教育開発センター教授、国立教育研究所所長等を経て、現在、早稲田大学特任教授、日本私立大学協会・私学高等教育研究所主幹です。日本の高等教育研究の先駆者、リーダーであり、現在活躍の多くの高等教育学者の師であり、高等教育改革、

大学評価に関する著書、訳書も多い。また、高等教育研究では、ノーベル賞級といわれ、カリフォルニア大学バークレー校のマーチン・トロア教授にも学び、エリート大学から、マス大学、ユニバーサル大学へという変革も紹介しています。



以下のような内容の講演でした。

1) 日本にある大学評価機関として、現在、歴史の長い大学基準協会（国立・私立大学の会員による相互評価）、そして最近できた大学評価・学位授与機構（政府と直結し、国立大学を評価し資源配分と関連）があり、それに喜多村氏が、今年、私学の大学評価法をまとめ、このための機構を私立大学協会から発足するということです。

2) 今日、大学の生き残りがかかり、大学が評価され、競争となっています。私学の大学評価は、私学が政府から独立し、自治を確保しながら、私学の質を守り、発展させ、社会的信頼を獲得していくシステムとして重要となります。このシステムでは、FDと自己評価が両輪となりますが、第三者評価は、大学の質を保障していく具体的改革・改善へ行動していく刺激に有効に活用されることとなります。第三者評価は、問題が起こる前のチェックとなり、問題点を外から指摘されることで、これを再認識し、改善へ結びつけることができます。

3) とくに後半、今春に視察体験した米国のニューイングランド基準協会による大学評価の話しから熱がはいりました。自己評価報告書は100ページ以内にまとめ、これがかえってポイント、特徴をあらわすによく、視察は3泊4日で、朝9時から夕方5時まで学内を駆け回り、それから夜中まで延々と討論をするという大変なもので、しかも評価を受ける

側も、する側も喜んで行っているというのです。評価される大学ではこの準備に、10を超える委員会で様々な視点から議論をつくり、これが大学改革・改善への情報公開のような形となって学内世論をつくり、自己改革の刺激となる、大学に品質の保証を具体的にすすめる力となると聞いた。また、する側も、これによって大いに勉強になり、自分の大学に持ちかえって自分の大学の改革に生かす。だから、他の大学のためにというのではなく、仲間内でお互いに良くする仕事となる、自分たちのためになるから熱心になるのだと話していたということです。

4) 喜多村氏は最後にケンブリッジ大学学長アシュビーの話引用しました。大学の機能は研究と教育にあるが、とくに第一義的機能は教育である。教授団の最大の忠誠が教育活動におかれるべきであるとの合意が達成されないかぎり、大学は社会に対して持ちうる価値の大半を失うことになる。卒業生がよかったといえる大学づくりは教育にある。最近では大学内では教養教育に力をいれない傾向にあるが、卒業生に聞くと教養教育をうけたことが良かったとよく聞く。教育では、とくに、学士教育が大切であり、とくに入学当初のフレッシュマン教育がその大学の将来をきめるといっても過言ではない。

質疑には十分な時間がとれなかったが、質問と関連して、教育に軸足をおいているが、研究を否定しているわけではなく、研究がよい教育を生むことをみとめている。研究は、すでに社会的に評価されているが、教育を評価してそれを支援していく大学としての体制が必須であり、とくに私学は教育重視に生き残りがかかっている。また、評価はランキングにやはり結びつくのではないかということに対して、私学では研究費配分ではどうしても国立に比べて不利である。私学協会による大学評価は、評点化、ランキングをしないことで、国立をこえた質を保証していくのが目的であると強調していました。

参加者は、喜多村氏の講演をわが大学の置かれた状況と今後の発展に思いをはせながら散会しました。

平成14年度北海道医療大学FDは泊まり込みワークショップ

場所は ないえ温泉

平成14年度のFDは、来る11月16日(土)ー17日(日)、1泊2日で実施されます。メインテーマは「総合大学としての北海道医療大学における教育戦略」です。各学部から期待される教員10名、計40名の参加を見込み、世話役のプロデューサー：廣重 力、ディレクター：阿部和厚、タスクフォース：黒澤隆夫、和田啓爾、有末 眞、川上智史、阿保順子、鈴木幸雄、事務：飛岡範至、笠原晴生で準備中です。

この研修では、最初の合宿ワークショップ型研修として、本学の発展のために、教育機関としての戦略を展望しつつ、機関をささえる教員の教育資質のあり方を理解し、教育の基本、カリキュラムプラン

ニングを身につけることを目的にします。合宿研修では、異なる部局、分野の異なる教員が、教育について普段着で対等な意見交換、討論をし、お互いのよいところを出し合っていくことに大きな意義があります。有意義で楽しい研修となります。

ワークショップ(WS)は、様々な資質の人があつまり、共同で作業しながら成果をだしていきます。今回は、メインテーマのもとに、グループで本校の特色をうちだせる科目を考え、授業設計していきます。これは小グループ学生参加型授業の体験ともなります。5つのサブのWSを以下のように行います。

温泉タイム、懇談会タイムも期待。

16日(土)

あいの里、当別キャンパスからバスで出発。バスの中で研修を開始。

10:00 ないえ温泉ホテル北乃湯 でFD開始

11:00 WS 1 北海道医療大学をめぐるニーズ

13:30 WS 2 科目名と目標の設定

- 1) 導入授業(フレッシュマンセミナー)、2) 統合科目、3) IT活用授業、4) コミュニケーション。5) 学生参加型授業 でグループに分かれて授業設計

16:30 WS 3 方略 授業設計

夕食前にお風呂ーリラックスタイム

夕食後も1時間ばかりお勉強

20:30 たのしい懇談会

17日(日)

8:30 WS 4 評価

WS 5 北海道医療大学を卒業したというアイデンティティをもたせる授業
柔軟なカリキュラム改革体制

15:00 終了

参加者は、以下の教育改革に資する具体的方略を身につけます。

- 1) 大学という教育機関における教育のあり方の基本
2) 学士教育におけるカリキュラム設計の基本 3) 各科目のシラバス表現の基本 4) 授業設計の基本 5) 目標設定と成績評価基準について理解 6) 学生中心授業
7) 総合大学での役割の把握

編集後記

新FD体制となってFD広報から見直すことになった。よみやすく、身近なこと、大学をよくするためにひとりひとりが大事、顔がみえる主張ということで顔写真入りのニュースとなった。今年は、冷夏だった。何といても11月の合宿研修が気がかりだった。多少の抵抗を、大きな前進のバネにしたい。こちらの新しい学部では、顔を合わせると、教育改善、将来構想の話となっている。あつい思いの夏。はりきりすぎず、みのり多い着実な前進に期待したい!(いさお)

発行日 2002年10月8日

発行元 北海道医療大学FD委員会

編集委員 阿部和厚、阿保順子、有末 眞、○太田 勲、川上智史、黒澤隆夫、鈴木幸雄、高橋 大、○土肥聡明、東城庸介、和田啓爾、西 基、飛岡範至 (○発行担当)